



暑中お見舞い申し上げます。

平素は、格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます。

酷暑の折、皆様のご健勝を心よりお祈りいたします。



「磐高物語」 14

オレンジ色に輝くニッコキスゲに別れを告げて、私たちは夏の宿泊地である丸沼キャンプ場を目指して出発した。

だが出発する前に、大木さんが朝から根を上げていた。

『おらあ、こわくて（疲れて）どうしようもね。俺の荷物持ってくれ』と、泣きを入れてきた。

『先輩、柔道で鍛えたはずじゃなかったですか』と、わたしは口まて出かかったのを飲み込んだ。

リーダー格の山岸さんが

『つがれだんだんっぺ、三人で持つてやっぺや』と、大木さんをいたわるように話した。

重いのは、炊飯用の水と米そして味噌や缶詰の食料品それにテントの布と鉄材等だった。勿論、各自の毛布や衣類は自分のリュックに詰め込んでいた。

水筒を肩から提げ、鍋や飯ごうをリュックにぶら下げてガランゴロンと音を立てて木道を歩く姿は、小学校低学年の頃見た傷痕

軍人の姿を思い出していた。



三平峠を越え群馬県側の大清水にたどり着き、やっと沼田市行きのバスに乗ることができた。学生時代にも一度逆コースを友人の隆しやんと二人で上ったが、登山客の多いにはびっくりした。

片品村役場前の停留所で降り、そこから金精峠手前の丸沼高原行きのバスに乗り換えてキャンプ場に向かった。

終着のバス停に着いた頃には、辺りは暗くなっていた。私たちは、同じキャンプ場に向かう大学の後を追いかけて歩いた。

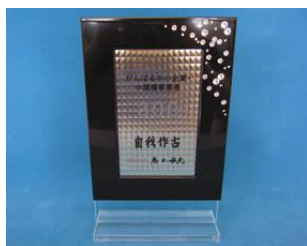
高瀬さんが振り返りながら『腹減ったなあ早くメシ食いてえ。さつきながら水ばつかしで腹カッポカッポ言ってるもんなあ』

『高瀬さん、着いたら直ぐに飯ごう炊ぐがら待つてくんちえ』

懐中電灯の明かりを頼りにテントを張り、急いで炊事に取り掛かった。食事をする高瀬さんの横顔が、焚き火に照らされて紅く微笑んでいるように見えた。

『尾瀬の旅・第四日』

☆ あとがき ☆



先日、「いわき市準倫理法人会」様のお招きで早朝講演をさせていただきました。倫理を重んずる方々の例会は、さすがに立派でした。

閉会后皆様と朝食を共にしながらがんばる企業 300 社に選ばれたとき、茂木通産大臣よりいただいた「自我作古」の言葉を思い出していました。

“我より古（いにしえ）を作（な）す” 一世の礎となれ—ということですが。